立教大學新聞
発行所
立教大学新聞学会
豊島区西池袋3丁目
郵便番号171
振替　東京70852
電話（985）2681
本号　4頁　20円

友への手紙
歴史・人間・文学

あなたは梶井基次郎の『檸檬』（レモン）という作品を知っていますか。

〈えたいの知れない不吉な塊〉によって始終心をおさえつけられているひとりの男が、壊れかかった街だとか、汚い洗濯物が干してあったりがらくたが転してあったりむさくるしい部屋がのぞいていたりする裏通りを、放浪して歩くそしてあるとき、果物店で、〈レモンエロウの絵の具をチューブから搾り出して固めたやうな〉紡錘形のレモンを買う。このレモンを丸善の書籍棚の上に置いたあと、男はこう思うのです。

〈「出て行かうかな。さうだ出て行かう」そして私はすたすた出て行った。（原文改行）変にくすぐったい気持が街の上の私を微笑ませた。丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇妙な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなに面白いだろう。（原文改行）私はこの想像を熱心に追求した。「さうしたらあの気詰りな丸善も粉薬みぢんだろう」〉

この作品が美しくまたすばらしいのは、この一個のレモンという果実に、作者の生命の火花をともいうべきものが、シンボリックに表現されているからに他なりません。

なぜ私がここに有名な『檸檬』を冒頭に引用したのかといいますと、近ごろ、私が奇妙な体験をしたからです。

私の住居は団地です。

この団地から都心へ行くにも戻るにも、バスを使用しなければなりません。

さて、あの日のことです。

私は懐しいSの町へ行き（そこは十数年親しんだ繁華街で時どき自分をさがしに行くような感じで出かけて行くのですが）帰り例によってバスに乗りました。

バスは満員でした。しかし水い時間並んだおかげで坐れた私は、鞄の中からやおら一冊の雑誌をとりだしました。

『試行』です。これは十年近く私の精神を鼓舞し支柱となってくれた雑誌であります。

このとき、ふっと幻想がひろがりました。

『檸檬』の主人公が丸善の書棚にそっと一個のレモンを置いてきたように、この満員列車のバスの中に、一冊の『試行』を置いてひとりだけこっそりバスを降りる。

（そうしたら、満員バスの乗客も、粉薬みじんだろう！）

『試行』という爆弾が破裂して人間たちを吹っとばしてしまう…これはちょっと甘美で刺激的な幻想でした。

しかし、停留場につく度に人びとは下車し、残り少なくなった乗客とともに終点で下り、私はオーバーの襟をたてたのでしたけれども。……

いつそや、私はあなたと暗い夜の道を歩いていて、「ああ、ここに爆弾があればなあ」という苦しげに呟くあなたの声を聞きました

あなたのアジトといわれるアパートの一室に私が寄った帰りで、あなたは私がそこで終始沈黙がちであったのが不満のようでした。

前方に見えるのは、大蔵官僚たちが社宅、ふつうの団地よりちょっと立派な高層住宅でした。

「あそこを爆破させてやりたい」

あなたの仲間のひとりがいいました。

するとあなたは眉をひそめ、「しかし、あそこには、奴らの女房や子供がいるからなあ」と嘆息しました。

現在の資本制社会の根源を刷出せねばならぬ、テロリズムという激しい心情に寄せる共感と、資本制社会の機構そのものをこそ根底から撃たねばならぬというあなたのいりまじった気持に、私は感じ入るところありました。

暗き、暗き闇野にも似たるわが頭脳の中に、時として、電（いかずち）のほとばしる如く、革命の思想はひらめけども――

あはれ、あはれ、

かの壮快なる雷鳴は遂に聞えず来らず。

すでに六〇年前、明治四十四年に、貧困と病に苦しみながら石川啄木はこう書いています。啄木の『一握の砂』を当分開けばいつしか再び啄木に思いやっている自分に気づきました。

私はあなたの言葉を聞きながら

われはかの夜の激論を忘るること能はず、

新らしき社会に於ける「権力」の処置に就きて、

はしなくも、同志の一人なる若き経済学者Nと

我との間に惹き起されたる激論を、

かの五時間に亘れる激論を。

「君の言う所は徹頭徹尾煽動家の言なり。」

かれは遂にかく言い放ちき。

その声はさながら咆ゆることくなりき。

若しその間に卓子のなかりせば

かれの手は恐らくわが頭を撃ちたるならむ。

われはその浅黒き、大いなる顔の

男らしき怒りに漲れるを見たり。

……

私はあなたに、啄木がいわれたのと逆に、きみのいうところは徹頭徹尾煽動家の言だ、というふうにはむろんいえません。

ただ私がいえるのは、闘争にしろ、運動にしろ、快して補塡物（ほてんぶつ）になってはならないということです。資本制社会を維持していくうえで議会が有効な補塡的作用をなし、日共が自民党の恰好の補塡物になっている。このグロテスクな構図ほど、私にとって嫌悪に充ちたものはありません。自立というコトバが流行語になり、こうなったとたんにコトバの風化作用がはじまるのが常ですが、補塡物にならぬという原理だけは貫きとおびたいものだと思っています。

しかしこの自己検証が完璧になされるにはたえまない思想と感性の練磨が必要でしょうけれども。

家族が寝鎮まったころ、時どき私は啄木の『日記』を繰ることがあります。とりわけ彼が家族のことで悩み、肉体が衰弱し、文学的煩悶にも打ちひしがれ、それでも生きる力をふりしぼらんとひたすらつづった晩年の明治四十二年ロ

ーマ字日記には心をうたれます。

〈（前略）予は悲しい。予の性格は不幸な性格だ。予は弱者だ。誰のにも劣らぬ立派な刀を持った弱者だ。戦わずにはおられぬ。しかし勝つことはできぬ。しからば死ぬほかに道はない。しかし死ぬのはいやだ。死にたくない！しかしらば どうして生きる？（原文改行）何も知らずに農夫のように生きたい。予はあまり賢こすぎた。予は悲しい。〉

〈人の希求までしている啄木の悲しさ

ここには鋭い思想と醒めた感受性をもった人間、時代の底辺で苦脳している人間の魂が写されていきるからです。そしてこれは悲しい。

私は本を閉じ、仰向けに寝て天井に目をやりながら、ふと〈歴史〉というものに、思いを走らせている自分に気づきます。〈歴史〉を自分の眼で見つめ、自分の言葉で語らなければならない。

ここで私は〈自分はどこからきたのだろうか〉と思うわけです。

私はあなたにラディカリズムと〈大衆〉との回路を問われたときふっと思ったのがこのことでした〈根深いぞ、根深いぞ……〉という声が、私の内部から聞こえたのです。

ここで私は現在、過渡的に思考していることをそのまま記してみようと思います。これは単なるデッサンです。そのつもりでおよみください。

ひとつはポーリーヌ・レアージュ『オー嬢の物語』の序文ジャン・ポーランの「奴隷状態における幸福」の論文です。

ここで彼はこう書き出しています。

「一八三八年、平和なバルバドス島で血みどろの暴動が起った。つい最近の三月の法令により、自由の身分に昇格したばかりの男女約二百名の黒人たちが、ある朝、かつての彼らの主人であるグレネルグという者の家に、自分たちをふたたび元の奴隷の身分にしてくれと陳情しにきたのである。」

この話の真偽を私は問うているのではありません。ただ〈大衆〉について語るさいにこれは笑ってすますことのできない何ものかを示唆しています。〈大衆〉は〈自由〉が恐ろしいのだ、という問題はたしかドストエフスキーの「大審問官」にも深く掘り下げて問題にされていた筈です。つまり〈自由〉が恐ろしくなるほど、あらゆる面での〈関係〉の〈貧困〉を強いられている〈大衆〉という存在。

〈宗教〉あるいは〈神〉を問題にするときに、これはかなり重要な問題を提出していると思います そして〈大衆〉について考えるさいに〈宗教〉を度外視することはできないのです。

時どき私はこう思うのです。

ロシア革命において、熱狂的にレーニンを支持したロシアの〈大衆〉と、第二次大戦中熱狂的にヒットラーを支持したドイツの〈大衆〉意識の内的構造は等似ではなかったのだろうか。自分らの解放者として、レーニンとヒットラーが全く等価にうつったとしたら〈大衆〉とは何か、です。

ある人はここで〈論理〉をいい〈思想〉といい、また〈ナショナリズム〉を問題にすべきだというでしょう。しかし眼前に苦しむロシアの〈大衆〉、失業者が続出し不況に苦しむドイツの〈大衆〉にとって、己れにパンを与えてくれる者にこそ、すがろうとするわけでしょう。

ここには〈歴史〉のイロニーといってすまされない重要な問題があると思います。

〈大衆〉は〈支配者〉の鏡ですつまり、〈支配者〉と同じような考えをもつ＝もたされることによって〈大衆〉は〈大衆〉であるわけですが、これをどこかで断ち切るにはむろんなまなかなことではない、というふうに思わざるをえません。つまりロシア革命がレーニンを掴んだ〉という〈歴史〉のダイナミズムをどこかでつくることができるか、ということが問題になってくるのです。

かつて六〇年以後の酸鼻の〈情況〉のなかで、学生たちは〈いかにして敗けるか？敗けきらなければならぬ〉という闘争をくりかえしました。

今またそれと似た〈情況〉がきているような気がします。つまり〈勝った〉か〈敗けた〉のかわからない、このような宙ぶらりんの状態ほど、〈思想〉の結実のえられないことはありません。敗けきることによって、次の闘い（これは政治闘争ばかりではない）のバネがえられる。そのためには、〈敗北〉の確認こそが必要です。

私はかつて闘争の積極的な推進者として自分を置いたことはありません。しかし六〇年代の砂ぼこりをかぶりあるいはそこをかいくぐって、何ものかを〈見た〉ことはたしかだと思っています。本質的にものを〈見る〉ということは飾らしいことです。〈すべて〉が〈見えて〉しまうのですから。本質的に〈見る〉ということは、両刃の剣です。相手を切ると同時に己れをも切る。

この怖らしさをさらにかみしめて、これから生きていくしかないと思っています。

〈泣きたい！真に泣きたい！

「断然文学をやめよう」とひとりで言ってみた。

「やめて、どうする？何をする？」

「DEATH！」と答えるほかはないのだ。実際予は何をすればよいのだ？予のすることは何かあるだろうか？〉

（予のすることは何かあるだろうか？）

啄木と同じように私もまたそう考えます。

そしてこれからさらに〈文学〉について研鑽（けんさん）をつむしかないと思っている自分に気づきます。

かつて私はこう書いたことがあります。

〈ここで私は学者の幸福ということに思いをはせる。そして私は泉鏡花、谷崎潤一郎、川端康成三島由紀夫という純粋に〈美〉のみによって自己救抜をなしえた系譜に嫉妬をおぼえる〉

三島由紀夫死してなお、私はこの文章に初正を胸中気はらりません。三島は〈美〉によって最終的に一回きりの自己救抜をなしえたと思います。三島にとって最高の〈美〉とは〈エロス〉におけるマゾヒズムであり、その拝跪（はいき）対象が〈国家〉＝〈天皇〉である必要があったのでしょう。三島は最後まで幸福でした。

三島が第一級の文学者であり、その作品のいっかは文学史に永くのこるものであることをみとめるにはやぶさかではありません。石木啄木なら、そのような生涯が完璧に幸福であることにはまさに嫉妬をおぼえざるをえないほどです。ただ三島について考えるさい恐ろしいと思うのは、〈戦争〉を通った男の内部の倒錯のドラマです。この意味では三島ほど〈時代の子〉としての生涯を刻んだ男もいないと思います。

ここで私は、透谷、啄木、漱石という不幸な文学者の系譜に惹かれている自分をかんじます。彼らは、自死、貧困ゆえの病死、病死というように、彼らの生涯を象徴するような死に方でこの世を去りました。ここに示される彼らのたかいの熾烈さは、私をとらえます。

ここで私がいっていることは、〈生活〉の〈文体〉化でもいったらいいのでしょうか。ひとつの〈作品〉は必ず〈文体〉をもちます。いいかえれば作家は〈文体〉を獲得しなければ〈作品〉を産み出すことはできません。

むろん作品が〈生活〉を〈文体〉化するかどうかは、その作家の恣意にゆだねられています。三島由紀夫は〈生活〉を生涯〈文体〉化することはありませんでした。

作家が〈生活〉を〈文体〉化するとは、具体的にいえば〈生活〉から逃げないことです。〈生活〉そのものの深みまで生きて、〈生活〉を二重に体験するといったらいいでしょうか。

むろんこのことはいわゆる私小説なるものを意味しません。私の〈文体〉に気をくばったかがよく記されています。彼の緻密な論理の歯車がうまく回転するためには〈文体〉の獲得は必至だったのです。

作家にとって〈文体〉も同じようなことがいえます。〈作品〉とは一個の全的〈宇宙〉であり、〈文体〉とはこれを生きる作家の生命の軌跡なのですから。〈文体〉を獲得していないとは作家という一個の人間がその〈宇宙〉を生きていない、ということを意味するわけです。

啄木の『日記』はひとつの文学作品になりえています。そこに啄木が生きた軌跡が、つまり〈文体〉があるからです。

しかしこの〈作品〉が次のようにおわっていることは大変示唆的です。

〈千九百十二年　二月二十日（火）日記をつけなかった事十二日に及んだ。その間私は毎日毎日熱のために苦しめられていた。三十九度まで上った事さえあった。そうして薬をのむと汗が出るために、からだはひどく疲れてしまって、立って歩くと膝がフラフラする。（原文改行）そうしてる間にも金はドンドンなくなった。母の薬代や私の薬代が一日約四十銭弱の割合でかかった。質屋から出して仕立直さした袴と下着とは、たった一晩家においただけでまた質屋へやられた。その金も尽きて妻の帯も同じ運命に逢った。医者は薬価の月末払いを承諾してくれなかった。（原文改行）母の容態は昨今少しよいように見える。しかし食欲は減じた。〉

これ以後、啄木は日記を書かなくなり、四月十三日に永眠するのです。

私はここに不幸な死のみをみて慨嘆する気はありません。ただ啄木を死に至らしめた〈時代〉の黒い手をかんじるだけです。

あなたへの手紙が、私の呟きのようなものになってしまいましたあなたの顔を思いうかべると、何かを堪えている苦渋の翳が、私にも伝わってきます。何かを堪えている、その〈何か〉の内実にこそ〈情況〉の、〈歴史〉の、〈人間〉の〈生〉と〈死〉のすべてが存在している、と私は思います。

最後になりましたが、私は啄木の『墓碑銘』という詩の結びの節が好きなのです。

「われには何時にても起ることを得る準備あり」　（子）

＊　＊　＊

矢島輝夫（やじまてるお）氏は作家。著書に『噛き魚』（構造社刊）『裂魂』（三一書房刊）。現在『艸』同人。最近作に『深海魚』（文芸三月号掲載）がある。

立教大学新聞は二九一号にエッセイ「転位は可能か」、二九四号に小説「首」を掲載。

2月号目次
▽友への手紙〈歴史・人間・文学〉……矢島　輝夫（1面）
▽フリードリッヒ・ヘルダーリン論（一）……中村　文昭（2・3面）
▽加藤　泰論……三箇　信也（4面）

早大合格第一位校★早慶受験の最高権威
早稲田学院
新宿区高田馬場駅際　駅一分ホーム中央
電話（362）928（代）
白亜十階

池袋
東京コンタクトレンズ診療所
●目に入れても痛くない！
●近視・乱視の進行をとめる！
最高の精度
学割実施
平日10－8時
日祭10－5時
池袋スカラ座さき
薬局3F（971）8188
永年の信用＊

『朝日新聞』『岩波書店』

『東京大学』を目して現代諸悪の根源はこの三つにつきるのだといった男がいた。なるほどと思った。少しばかり偏狭なものいいではあるが心事としてわからぬでもない。まったく、と私もまた言おう。「文化左翼」の西洋文物への小商人的才覚と場あたり的な妄想がまきちらす害毒については、これを強調してしすぎることはないのだと。

彼等を一名ブクガキ左翼という一度も本気で苦しんだこともないくせに救われたがの処方箋だけは常に書きたらしているからである。筆を振り口を開けば憲法を守れ、言論出版の自由を守れと居丈高に号令して問題をすりかえ、事を本質において刷扶することなく制度的保障の問題に還元して解消することを専らとし、快して知識そのものを庶民のあるがままの態様にてらしながら確固たる考究をおしすすめるという態度をとりえない。そうすることの必然性を知性のそもそものあり方とし目覚することもできなければ、もともとそうするだけの力量も持ちあわせてはいないのである。

であるがゆえに一定のポピュラリティを持つ。結局人間は思想の外に住んでいるのだということの本当の恐ろしさを弁えない鼻たれ知識人の「進歩」の護符をおし戴いた世迷い言を、一方で、なまじ大学などへ出入りしたばかりに類史的に累積されてきた幻想であるところの思想や芸術を、これこそ歴史の実体と思いこみ、ただの生活をあたかも虚構の如く見做す倒錯の道を歩みはじめた者たちが、まことに類は友を呼ぶとはよくいったもので、信徒よろしく有難がるからである。

男の心事とはかくの如き情態へのやりきれぬ憤怒でもあっただろうか。先に挙げた三著は所謂「進歩的知識人」の代表的な穏息地にほかならない。だとすれば、矢張りほんの少しだけ偏狭であると言わざるをえないかもしれぬ。

江戸期の、いわば農本的共産主義者、安藤昌益の著作『統道真伝』の中に次のような一節がある〈転定直耕の真道を知らず、文字を作り、学問・教訓を制り、衆を誑す道具を為り、弥々貪り貪れば益々乱世と為る。是れを知らざるは第一の愚者なり。次に学問して貪食し聖教を貴びて一命を惜まざる者は第二の愚鴆にして、己れを知らざるの迷者なり。〉

そしてこれは岩波文庫の一冊である。

まあいいではないか。

反革命分子は、もうひとひねり反革命してやればそれで駄目になるのさと私は思う。反革命を反革命することは秀れて革命的な営為なのである。　（S）

S&S
STEEL MAKER　SHIP BUILDER
日本でただ1社
製鉄・造船を兼営する――
この独特な企業形態をとっているのは
日本で日本鋼管ただ1社。
合理的な企業姿勢、たくましい開発精神から常に良質で安価な製品を生産。
また製鉄・造船の経験と技術を活かして重工業分野へも本格的に進出。
鉄鋼業の新しい方向を開拓し、70年代躍進ニッポンの推進力となっています。
この技術！鉄なら船なら NKK
NKK 日本鋼管
東京・大手町　TEL代表(212)7111

構造　3月号　¥160円
特集■プロレタリア独裁
プロレタリア独裁論……対馬　忠行
マルクス主義と労働者国家官僚制……湯浅　越男
第三世界革命への合流に向けて……黒木　龍恩
非合法党建設と世界プロ独の綱領問題……百済二文太
国家暴力と革命暴力をめぐる走り書き……黒木　瞳
東南アジア紙の論評にみる日本軍国主義の復活……佐藤利郎訳
実践的自己変革と全体性の回復……高野　光世
なにから始めるべきか……太田　竜
プロレタリア革命軍事論……磯田　計成
経済構造社　東京都中央区京橋2－4　TEL（272）2659

現代の眼
3月特大号・発売中・180円
特集＝戦後社会と幻想の〈人民〉
戦後〈大衆〉像と全共闘運動（対談）鶴見俊輔・長谷川宏・補
日本マルクス主義の地平　有田越郎
盲目的反抗と〝挫折の世代〟　遠藤英雄
総括・全共闘運動
直接行動と暴力……滝田　修
自己否定は持続する……最首　悟
不安の遊牧……加藤典洋
〈座談会〉〈経験の範疇〉から〈有体の運動〉へ
体験から何を展望するか　田村正敏・雑賀元昌・余村泰隆・弘敏
アメリカ・ファシズムの展望　神谷林二郎
（調査レポート）司法権幻想の内側　桐生二郎
東京・京橋3－11　現代評論社　振替東京4419

好評理工学書目録贈呈
化学基礎実験
理博／丸田銓二郎著　複雑な現象の根底にある自然の摂理の認識と法則性を応用する科学的態度の体得をネライとして、定性／重量／比色／容量／物理化学／有機化学の基礎実験につき1回3－4時間内で教材を厳選し適切に解説した最新刊！
A5判　¥650　〒70
英和和英 新化学用語辞典 改稿新版　橋本吉郎著　2万3千5百語を英和英に配列し訳語化学式　千五百円〒90
化学ドイツ語新辞典　橋本吉郎著　化学および自然科学関係のドイツ語2万5千語　千五百円〒90
化学英語の解釈研究　橋本・谷野著　化学英文に精通する例題四七一題に適切な訳解　七百円〒70
化学ドイツ語の解釈研究　橋本・川本著　化学常用動詞ほか五三〇題　八五〇円〒70
101 東京都千代田区神田神保町3－2　(264)5711　振替東京1065
三共出版株式会社

疎外された、詩人の神話

ハイディガー評価を中心に＝連載第一回＝

昭文　中村

前号「ロートレアモン論」に続いて十九世紀ドイツの叙情派詩人、フリードリッヒ・ヘルダーリンをとりあげる。

近代の暗渠に棲み疲れ、西欧の古典時代ギリシヤに文明の純潔を見出してそこへの一体化を希求しながらも、ついに神をひとたびも疑うこと能わざりしが故に神の不在を生き、三十代なかばにして精神を病み、以後生ける屍となり果てて七十余年の生涯を狂気で死んだ詩人の生き様は、今日、「文明とは何か」「人間とは何か」という命題を存在としての自己の根柢に据える者にとって、示唆あると多きを信ずるものである。

筆者中村文昭氏は詩人であり、今夏「あぽりあ叢書」第一巻として詩集を刊行するほか、現在『試行』に「ランボー論」を、同人誌『あぽりあ』に「人間的現実の時間論的証明」を連載する文芸評論家でもある。本号より第一期分として、第一章「ヘルダーリンの評価をめぐって」第二章「ヘルダーリンの詩について」を六回にわたって連載する。第二期分として、第三章「ヘルダーリンの狂気について」第四章「現代詩人とはなにか」を掲載の予定。（編集部）

□序・土着と純潔の相殺

わたしたちはヘルダーリンの諸詩篇、小説諸論文の莊大な発想に感嘆し感動の血潮を禁じえない。わたしたちは彼の苦悩をわたしたちの現体験として許容する。しかし、「人間には何かが欠けている」と彼が言った意味で彼には何かが欠けていた。

わたしたちはヘルダーリンの残していった諸作品をまえにして憂鬱になり悲しくなってしまう。それらの諸作品のどこを切りとっても、前提されたひとつのことが、彼の一生を暗くなぞっている。つまり、彼の讃歌と叫びが明るくそこに溶けていけばいくほど、彼自らの本源的魂はみすぼらしく痩せてゆき、疲労困憊していくことが彼の諸作品にはっきりと示されているからである。なぜか。なぜ、素直に母の希望をうけいれ彼は牧師たる生活、者の道をえらばなかったのか。

人はこのわたしたちの問いかけに対し、安易に彼の先天的魂の真摯性、予言者的感受性をもって答えてはならない。かつまた、彼の後天的な政治的、宗教的感受性をもって答えてもならない。そうではなく、わたしたちが問いかけているなぜは、誰もが動かしがたい関係の絶対性、運命の一歩手前におけるヘルダーリンその人の自由にむけてのなぜなのであり、そのような問いとして、わたしたちの倫理的根拠をも簡明化させることなしには答えを得ることのできない絶対的次元を意味している。

わたしたちはヘルダーリンの諸作品をまえにして卑近な発想にひきさがる。彼の発想が高みの荘厳さを増せば増すほど、わたしたちはそこにメマイしながら遠まく自らの当惑の底辺にうごめく卑近さを肯定していく。

この逆説的接近のパラドックスのなかでわたしたちはわたしたちの土着的な卑近さをへルダーリンの高みの純潔によって殺すと同時に、ヘルダーリンその人に欠如していた土着的深淵をもって彼の高みを殺すのである。このような相殺において、わたしたちは〈現代〉という時点に未知の時制を開示することができるはずである。

ヘルダーリンが、ドイツ的土着の深淵を対象化することをその出発的において避けたことは、彼のコトバによれば、それがもっとも困難なことであったからであった。しかし、このことは、わたしたちの観点からすれば、意識の生成志向性を無視するアプリオリな前提条件が彼の発想に生涯からみついてはなれなかったことを意味している。

自らの土着的深淵に浮遊する根なし草のような卑近さの根源を開示することはヘルダーリンが嫌うことを最後まで拒絶した神の概念の消滅を意味することであった。

わたしたちがヘルダーリンに愛着するのはひとつに、彼が西欧文明の贖公子でありながら〈時代の子〉として西欧文明の悲劇を体験した殉教者であったからである。そして、ふたつに、彼が自らを自らたらしめている絶対的根拠を自己において開示する情熱の火柱に極限まで耐えたことにうたれたからにほかならない。

しかし、わたしたちは、いまや、その感動のふところでうずくまり緘黙しているときではないのだ。わたしたちは何かを語らなければならないのだ。それはヘルダーリンを対象として、わたしたちのまなざしの外におくことを許容することである。そしてそれは、人間的自己疎外に理論的な解放の指標をうちたてることの必然性を意味する。

わたしたちはヘルダーリンを対象化する。それは彼の言う「神の国はまじか」であるという予兆からくる必然性ではない。そうではなく、まさにヘルダーリン的な予兆になぞられながらいえば「本来的に神は欠如しておいその欠如は無の深淵によって充実的消滅にまでたかめることが不可避な現代課題の一環である」ことに由来している。

一にして全である無の充実になげだされている人間の叫びが、わたしたちをして、ヘルダーリンへの沈潜をその根底において拒否させているのである。その無への解放にわたかまる存在疎外をヘルダーリンを対象化するなかで試みる位相にわたしたちは立っているのだ。

序文からわたしたちはわたしたちの立場をあまりにも主観的に前面化しすぎたであろうか。たしかに前論理的な概念においてわたしたちは自らの観点を表明しすぎたかもしれない。しかし、ヘルダーリンについて語ろうとするわたしたちにとっては、わたしたちの結論的なものからはじめることが不可欠のようにおもえたのだ。ヘルダーリンの詩的魂に魅せられ、その魂の狂大さに震慄されればされるほど、彼からこおむった心情をふりはらうためこのような語り口がわたしたちに優先されたのである。

□〈特の本質〉への当為の拒絶

幸いにも、わたしたちはヘルダーリンの詩の詩人性についてすぐれたハイディガーの評価を手にすることができる。ハイディガーの次のコトバに耳をかたむけることから始めよう。

詩の中に純粋に歌いこめられているものが、多少なりともより明らかにその真実の姿を示すためには、解説の言葉は、おのれ自らを、そしておのれの試みの結果を、その都度、うち砕いてゆかねばならぬということである。詩の内実を明らかにするためには、詩の解説は、自らを過剰にしなければならない。だがすべての解釈の究極的至難な歩みは、原詩の醇乎たる姿の前に、ただただしい註解語が消えてしまうことによってなされる。そのとき固有の法則をもっているその詩自身が、直接に他の諸詩にも光を投して行く。それゆえ、繰り返し読むことによって、われわれはそれらの詩をもよく理解できたように思われるそのことを考えれば、ヘルダーリンが選ばれたのは、彼の作品がほかのものと相並んでこれもまた詩の普遍的本質を具現しているからというのではなく、ひとえにヘルダーリンの詩が詩の本質を真正面から詩作するという詩人の使命によって担われているというその理由からである。ヘルダーリンは我々にとって言葉の卓越せる意味に於て詩人の詩人である。

同

ハイディガーの〈詩の本質〉に対するあゆみよりが、既存のものと異なる一点は、「詩の普遍的本質」というものがまず存在し、ゲーテ、ソフォクレス、ホメロス、ヘルダーリン等すべての詩人においてそれが具現されるといった当為を拒絶していることである。コトバをかえていえば、その拒絶において〈詩の本質〉を〈詩人〉の実存性と近接されているところを強調している一点ということである。

□ハイディガーの理想化

つまりハイディガーにとって〈詩の本質〉ということと〈詩人の使命〉ということは同義である。その同義性に実存している詩人が詩の本質であるという意味において、ハイディガーがヘルダーリンをさして「詩人の詩人」と強調するのは、ヘルダーリンその人において彼らにある〈詩の本質〉と〈詩人性〉とのゆるみが緊張してる感性に由来している。つまり散文家として〈詩人の初原的言語の彼岸にまなざしをそそぐハイディガーにとってゲーテ、ホメロスらのように詩人に完結している詩人とは、あまりにも実存と断絶しているが故に散文的なのである。それに反し、彼らの完結性に対して志向しながら未完成のまま完成していったヘルダーリンこそは彼らに比して散文的な「ひとをかの快断のなかに据える」が故に〈詩的本質〉と〈詩人の使命〉とを現身に反映させる詩人の中の詩人なのである。

しかしハイディガーが、ヘルダーリンをさして「詩人の詩人」と、言葉の卓越せる意味において名称するとき、実はそれは、ハイディガーが自らの散文性としてなげだれている実存に詩的初源の橋わたしをしてくれる「賛を意味してはいないだろうか。詩人たりえなかったが故に自らの実存を世上にさらしながら天上に宙づりされた現世的歌びとを指して、ハイディガーは詩人と彼を呼んではいないだろうか。「ヘルダーリンは我々にとって言葉の卓越せる意味に於て詩人の詩人である」といういいまわしが、ヘルダーリンは詩人たりえなかったが故に詩人であったという悲劇の逆説であったとしたなら、それはそれでいいのだろうか。否、断じて、否である。ハイディガーのヘルダーリンに関する「詩人の詩人」という規定が、あまりにもヘルダーリンの実存を疎外した規定でありすぎ、それ故、あまりに、ハイディガー自らの詩に対する絶望の理想化に近づけすぎるとわたしたちが言うのは本源的な理由由来しているのだ。

悲歌、もしくは讃歌という名がつけられているにも拘らず、ヘルダーリンの詩の本質は現在に至るまで、われわれにはわかっていない。彼の詩は神殿のない厨子のようなもので、その厨子の中に、彼の詩の内実の扉をあけるにいたらず外在的観想にとどまっているということを暗ににおわせている。その本源的理由として、ヘルダーリンの詩的言語が、いかなる他者の散文的註釈語によっても、そのふりかかりの瞬間に音色をそこなってしまう孤高のものであること、そして、ふたつに、このようなヘルダーリンの詩的言語の註釈、解釈に対する拒否反応の存在理由を「神殿のない厨子」としてハイディガーは根拠づけている。

こういう性質の詩に対しては、おそらくいかなる解説を試みても、それは鏡にふりかかる雪にすぎぬものであろう。

同

このようなヘルダーリン規定が美しくはあるが、異議をとなえたくなるのは、ハイディガーがヘルダーリンの疎外された詩人性を、「詩人の詩人」として理想化しすぎることと、そのことによって生の実存＝ヘルダーリンを殺してしまっていることである。

ヘルダーリンはたしかに詩人であった。彼自らもそれを自らの生の糧としており、そう名称されることに充実していた。しかし、ヘルダーリンは詩人である前に人間であり、人間として詩人たろうとしたのではなかったか。ハイディガーは、あまりにヘルダーリンの詩人性を強調しすぎ、詩人としてのヘルダーリンにヘルダーリンの全体を疎外してはいないか。

このような評価の背景にハイディガーのヘルダーリンに対する宙ずりになった悲劇的な地上性がアプリオリに肯定されているからである。地上的人間＝ヘルダーリンを了解するが故に、彼、ヘルダーリンを天上的に逆規定する錯誤がハイディガーにはあるのだ。ハイディガーはヘルダーリンが詩人たりえなかったことをある意味で知っている。それ故、ハイディガーにとって自らの散文的地上性がヘルダーリンの現身に近接しえる余地をみつけえるのである。その近接にあって、ハイディガーの当為は、ヘルダーリンの詩人性を「詩人の詩人」として抽出していくのである。そして、この抽出の過程に、ヘルダーリンの生身はハイディガーによってネグレクトされてしまう（＝神聖化されてしまう）のである。

ハイディガーは最初にヘルダーリンの現世的あり方に自らの近接の余地をみつけえておきながら、一端ヘルダーリンの現世的天上性を「詩人の詩人」として規定してしまうとその現世的ヘルダーリンそのもの、つまり詩人たりえなかったヘルダーリンの実存は神託のように天上的装飾、詩人の詩人たる使命のためのささげものに超一元されてしまうのである。つまり、

詩人はかく自己の使命の故に最高の孤独、のうちにあって自己自身のもとにとどまることによって、彼は自己自身の民族を代表し、したがってまた真実に自己の民族のための真理を獲得するのである。

「ヘルダーリンと詩の本質」より
（傍点＝中村）

わたしたちは注意してハイディガーのコトバのひとつひとつをかみしめなければなるまい。

〈彼は〉は最高の孤独のもとにとどまることによって詩人であり、その孤独な現世的実存に自己の民族のための真理を獲得する、と

（三面につづく）

実存を世上にさらし
天上に宙ずられる歌びと

ばよいのである。

「ヘルダーリンの詩の解明」序言より
手塚　富雄・他共訳

この序言のなかには、現象学に洗礼をうけた哲学者ハイディガーの相貌がやわらかに表象されている。ハイディガーの発想には〈詩〉に対する散文的な距離が意識されている。そしてここにはその散文的な距離の空洞を彼自らが埋めるための手探り的アプローチが告白されている。

ハイディガーが〈詩〉にあゆみより、詩の内実に現前しようとすることは、自らの散文性を「過剰に」する錯乱のただなかで、その散文的註解語が原詩の現前に透明に消えていく投企として了解されている。この方法には散文家が〈詩的言語〉にはらう畏敬の配慮が感じられるとともに、ハイディガー哲学が初原的言語たる〈詩〉を包括したところで存立するものではなく、逆に、〈詩〉への配慮的緩望のうちに存立する哲学であることを暗に表示している。

このようなハイディガーの観点がヘルダーリンに附与する名称は「詩人の中の詩人」という名称である。ヘルダーリンの詩人性を詩人＝ヘルダーリンという等式のうちに還元するハイディガーの手つきに、わたしたちはまず問題をみなければなるまい。

詩の本質を示そうと意図するにあたって何故に特にヘルダーリンの作品が選ばれたのであるか？

「ヘルダーリンと詩の本質」

斉藤　訳

ヘルダーリン　（Friedrich Hölderlin）1770–1843

ドイツの詩人。ウュルテンベルクのラウフェンに生まれ、チューピンゲンに没。ヘーゲル、シェリングとともにチューピンゲンで神学を学ぶ。フランクフルト・アム・マインに移ってズゼッテ・ゴンタルト夫人の息子たちの家庭教師となる。夫人のうちにかれは理想の女性（ディオティーマのモデル）を見出す。一七九八年、彼女のもとを去り、遍歴生活に出て精神錯乱に陥ってドイツに帰る。しばらくは、時に短歌の断片などを書いたが、一八〇六年以後は全く不治の状態となり、なお三十六年の余命を精神の薄明にとざされて終った。書簡体小説『ヒュペリーオン』は〈ギリシアの隠者〉という副題をもち、すでにイエーナ時代に執筆を初めその断片はシラーによって雑誌「新タリーア」に発表された。ここに最も明らかに、ギリシア精神とドイツ精神の統合を求めてやまなかったかれの努力が認められる。人間生活の理想をかれは古代ギリシアに求めたわけであるが、そのギリシア崇拝は古典主義のゲーテ、シラーが芸術の理想として、客観的にあこがれの対象としたのと相違して、かれの生活と精神のうちに生じた人生理想がギリシアのそれと一致したのである。由にギリシアはかれの真理であり宗教でもあった。

代表作
詩・賛歌「ライン」「多島海」「縛られた流れ」
小説「ヒュペーリオン」
戯曲「エムペードクレスの死」＝未完

懸賞小説作品発表

▽該当作なし

▽応募作品は次の通り

『夢がたり』北島　秀明
（大学院日本文学研究科）

『夏の町に』大岡新（日文三年）

『螺旋』　由利麟太郎

『行為の影』加賀慎太
（独文一年）

『灰色の衝撃』加賀慎太

▽選評及び次回の応募要項は新入生歓迎号に掲載します。なお、原稿の返却希望の方は四月一日以降本会にておわたしします。

立教大学新聞学会

オリベッティの哲学には目を見張らされる——

毎日新聞（昭和45年11月30日付 イタリア特集）

オリベッティ

☆☆☆　☆☆☆
オフィスに革命

本社のあるイプレアは、人口二万の小さな町。ミドリになされた本社は、まるで研究所みたいに物音一つせず、ひっそり静まり返っている。しかし、ここには、海外各地のオリベッティから、たえず最新の情報が殺到している。ブルーノ・ヒモンティーニ社長が、補佐役とともに、それを分析し、処理し、決裁、ハンコを下すのだが、面白いことに、イプレアを総指揮官とすれば、手足となり足となるオフィスは、国内各地に分散している。たとえばミラノの営業本部、ローマの国際関係本部といった具合である。フィレンツェには、広大なルネサンス時代の別荘の中に、オリベッティ研究所があり、日本人を含めて、アメリカ、イギリス、ドイツ、ナプリカ、その他世界中からの〝オリベッティアーノ〟たちが、〝哲学〟と、常に強調していたが、産学工学から経営学への脱皮にいそしんでいる。

現在、オリベッティの製品リストとは、タイプライターはもちろん、テレプリンター、加算機、会計機、電子計算機など、かなり多い。これらのいくつかをセットした総合的な事務機もある。

「オリベッティは世界のオフィスに革命をもたらした」といわれるほど、事務の合理化、機能化をもたらしたのである。

しかし、こうした外面的なものもさることながら〝オリベッティ・スタイル〟といわれる工場や製品に対する〝哲学〟には目を見張らされる。

創始者カミロ・オリベッティのあとを継いだ息子アドリアーノ・オリベッティは、一九二六年から驚力的な経営に当たったが、とくに〝物質的価値と精神的価値の調和〟に意を注いだ。つまり、工場建築、都市計画、福祉施設、成人教育、社会学、技術調査、視覚芸術、出版事業、公共事業を総合して発展させたのである。いかえれば、彼の目は企業の発展よりも、その企業を動かす人間と環境に注がれたのだ。

そういう彼の理論は、まず工場建築に、そして製品のデザイン、写真家、建築家、画家、作家、社会学者たちをも動員し、広告に、もかけられていった。このことはカミロ・オリベッティも同じ考えで「機械はけばけばしく、趣味の悪いものであってはならない。質実で、しかも優美でなければならない」と、常に強調していたが、息子アドリアーノは、それをさらに発展させて「オリベッティの製品のデザインは快適で、機能的で、しかも人間味のあふれるものでなければならない」といった。

その理由は「文化とは、できるだけ〝美〟を導入することだ。なぜなら、人間は物理的条件からではなく、審美的条件から進歩するから」という。オリベッティが現在〝芸術と科学を融合させた会社〟とイタリアらしい別名を与えられているのは、そのためでもある。同社の幹部にいわせると「わが社の製品は、機械ではなく芸術品だ」という。

いってみれば、オリベッティでは工場から製品まで、すべて人間の進歩のためのものという考え方である。オリベッティの広告が、即効的なショックを与えるものではなく、人の心に深く食込み、いつまでも忘れさせない優美さと親密さをもつ個性あふれるものとして、芸術家から推奨されるのは、そうした発想からでもある。

アドリアーノ・オリベッティは、企業としてのオリベッティを発展させるために、製造技術者だけでなく、工業デザイナー、写真家、建築家、画家、作家、社会学者たちをも動員し、そして養成した。そのアドリアーノは、六〇年二月に旅行中に死去したが、このオリベッティイズムは、いまなお受継がれ〝世界のオリベッティ〟として今日を築き上げている。

オリベッティイズム——
製品から地域社会までを貫く創造哲学
〈われわれは，われわれが存在する時代に，
われわれの社会に対して物質的な貢献をすると同時に，
道義的，文化的な貢献を果たさなければならない〉

これが，オリベッティのすべての活動の底流をなす思想です。
文明が人間を疎外してはならない——
世界の産業界に目覚めた〈現代のヒューマニズム〉を，
創立当初(1908年)からの哲学として実践してきた企業，
それがオリベッティです。

オリベッティは〈人間〉を求めます
●お問合せ，会社見学は随時受付けております。ご遠慮なく下記へご連絡ください。
人事部人事選考課
東京03-714-1211(代) 03-714-2758(直)
大阪分室　06－201－0835(直)
大阪市東区平野町5-30-1　不動建設ビル
olivetti
日本オリベッティ株式会社
東京都目黒区碑文谷1－26－17

ギャランGTO　Hip up coupé

三菱自動車

いよいよヒップアップ・クーペの出番です。独得のGTOフィーリングを心ゆくまで満喫できます。

MI——OHC　1600cc　100ps
170km/h　¥791,000

MII——OHC　1600cc　100ps
185km/h　¥848,000

MR——DOHC　1600cc　125ps
200km/h　¥1,145,000

東京三菱コルト自動車販売(株)
東京都新宿区西大久保4丁目170番
TEL（209）2111（大代）〒160

地上的人間の天上的逆規定

ハイディガーの羨望の理想化

〈二面より続く〉

ハイディガーは意味すけている。しかし、この意味すけが残酷で当為的で、傍観的であるのは、ヘルダーリンの孤高の孤絶が彼の情熱にもかかわらず「自己自身の民族を代表」することができ、「したがってまた真実に自己の民族のための真理を獲得する」こともできない悲劇性故なのだ。なぜなら、ホメロス、ソフォクレス、ダンテ、シェクスピア、ゲーテにおいてしかりのように「詩人はかく自己の使命の故に最高の孤独の」克服にあって、「自己自身のもとにとどまることによって、彼は自己自身の民族を代表し、したがってまた真実に自己の民族のための真理を獲得するのである」からだ。まったく逆なのだ。ヘルダーリンが、生涯ひとつの前提、ひとつのタブーを破棄できなかったように、ハイディガーはヘルダーリンの現世的あり方に自らの散文のあゆみよりの余地をみつけ、つまり詩人＝ヘルダーリンという固定概念をアプリオリに措定している。

詩人そのものは彼と此即ち神々と民族との間にたっている。詩人とはみに投げ出されたもの――即ち神々と人間との間のその中間に投げ出されたものである。けれどもこの中間に於てのみそしてそこに於て始めて人間とは離であり何処に人間はその現存在を定住せしむるかが決断せられる。「人間はこの地上に於ては詩人として住んでいる。」

前回

ヘルダーリンは彼の詩人としての言葉をこの中間領域に捧げている。そしてこのことが我々を強制して彼は詩人の詩人であると告白せしめるのである。

前回

ハイディガーは、ここでヘルダーリンの実存を天上的高みにうちあげ、うちあげるかなたで、自分の倫理の彼岸あり方を、人的に示している。が、決してこれは彼自らを語っているのではない！わたしたちはこのようなすばらしい(!?)ヘルダーリン評価をまえにし、逆説的意味でヘルダーリンに対する深い畏敬にふたびつれもどされる。ハイディガーのヘルダーリン評価が鮮烈をきわめ、その倫理的高みに人々を震慄せずにおえないものであればあるほど、わたしたちはハイディガーがその人の非ヘルダーリン性へとうきかえされる。それは、あたかもヘルダーリンの神の国への讃歌が鮮烈と豊かさをきわめればきわめるほど、現身のますしさに彼自身はおいやられたのに似ている。

□神の国からの疎外

ハイディガーがヘルダーリンの倫理的詩性に感銘していき、そのヘルダーリンの現身まで、ヘルダーリンの詩人性として包括する様は、あたかもヘルダーリンが神の国から疎外されているにもかかわらず神の国を讃え、不可視の神話を言葉にかえたのにもにている。このことはハイディガーその人にそして言えは、非詩性、非詩人性の空洞がひろければひろいほど、ヘルダーリンを神格化せずにすませられない欠如した詩的空洞に対応している。

しかし友よ、われらはあまりに来ることが遅かったのだ。もとより神々は生きている。しかしそれはわれわれの頭上の、別の世界のことだ。

そこにおいて神々は無限のはたらきをつづけている、そしてわれら人間が生を保っているかどうかはほとんど心を労していないように思われる。それほどに天上の神々はわれをいたわっているのだ。

なぜなら、弱い容器はつねに神々を容れることはできず、人間はただときどき神的な充実に堪えうるばかりだから。

生はようやく神々を夢に予兆するだけだ。しかし道に迷って彷徨することにも眠りのそれに似た恵みはあり、窮乏と夜とは人を強くするのだ。

そしてやがて青銅の揺籠にたくましい英雄は生い立ち、心情の力はかってのように天上の神々にぐらべられるものになるのだ。

そのとき雷電とともに神々は来る。というものの、しばしばわたしには、このように同行者もなく、このように待ちつづけている。

眠ることがまさっていると思われるのだ。まことに、何をすべきか、言うべきかをわたしは知らない、そして乏しき時代に詩人は何のためにあるのかを。

けれど詩人は（そうおんみは言う）、聖なる夜に

国から国へめぐり歩いた酒神の聖なる司祭たちにひとしいのだ

ヘルダーリン
『パンと葡萄酒』
手塚　訳

「招かれる者は多いが選ばれるものは少ない」というキリストのコトバの意味するように、ヘルダーリンは神々の婚宴に入るのに「礼服」を身につけていなかったのであろうか。そうではない。

ヘルダーリンは神を待っていた。しかし、神は来ず、彼のまえに現われない。しかし、ヘルダーリンは疑うことなく神の国が近づいており、それが自己に現前するのを待ちつづける。

ヘルダーリンは自己と神の国とのこの断絶を「しかし友よ、われらはあまりに来ることが遅かったのだ」としてうけとめる。そして、この神の不在に対する消極的な受けとめ方はヘルダーリンをして、次のように積極的な命願の表出にむける。

□孤独の孤高に耐える叫号

神は人間に「ほとんど心を労していないように思われる」しかしそれは「天上の神々」が「われわれをいたわって」いるしるしであり、人間をしてその神のいないあいだにおこる「窮乏と夜と」によって「人を強くする」ためであり、このような試練のはてに人間の「心情の力はかってのように天上の神々にぐらべられるものになる」。

そのとき、いままで神の力をうけるに「弱かった」人間の「容器」は「雷電とともに」あらわれる神々をうけとめえるものとなっているのだ、とヘルダーリンは確信する。

しかし、この確信は、詩人ウィリギリウスによって迷いの林から「地獄」をぬけ「浄火」でペトラッチにうけとめられ「天登」へとまねかれたダンテの確信となんと違うことか！ヘルダーリンの確信とはあくまでも神の国から疎外されたまま現世的になげだされ耐えている生身の人間の叫びであり、願いである。

ダンテの「神曲」が、ダンテ「自身の民族を代表し、したがってまた真実に自己の民族のために真理を獲得」した自己疎外を揚棄した人時的言語であるのにヘルダーリンのそれは、明らかに異なる何かなのだ。ヘルダーリンの詩にはそれものは表面がいかに豊かな知識によって人類的、祖国的、詩人の使命的なものに映ろうともそれらから常に疎外されれ傷つけられ裏切られ孤独の孤高に耐えている透明な叫号なのである。

ヘルダーリンは神をまっている。しかし、依然として神は彼に福音を与えようとしない。しかし、彼はその「窮乏と夜」によって強くなろうと意志する。しかし、ヘルダーリンは言ってしまう「とはいうものの、しばしばわたしには、このように同行者もなく、このように待ちつづけているよりは眠ることがまさっていると思われるのだ。」と。ここにはダンテ的な霊感によって表出されたらぐられるものになる。

ヘルダーリンにとって〈詩人〉とは自らではない。つまり、ヘルダーリンにとって〈詩人〉は自己だりえない他者なのであり、彼はその内実から疎外されている空洞を半ば眠げに凝視し函をくいしばっている生な人間なのだ。何をなすべきか、言うべきかを彼は本当に「知らない」のだ。

だからこそ、ヘルダーリンにとって（自らが根本的に〈詩〉とつきまとわれていること、）そして、自らが詩人たりえねばならない時代は「乏しい」のである。何をすべきかも、言うべきかもしらない自らが、〈詩〉に関与させられていること、この関与の積極的な意味を担う霊感を所有しない魂が詩人でなければならない時代。ヘルダーリンにとって、まことに次のことばは苦汁に満ちた逆説ではなかっただろうか。

だけど詩人は（そうおんみは言う）、聖なる夜に

国から国へめぐり歩いた酒神の司祭たちにひとしいのだ

と。

ヘルダーリンの眠りかけたまなざしが、自らの体に傷をつけ、その傷口を深くすることによって覚醒していくさまがこの時句の自己表出ににじみでている。

「だけど詩人は（そうおんみは言う）」と表出するヘルダーリンは、すでにその「詩人は」の「詩人」ではない。

「聖なる夜に、国から国へめぐり歩いた酒神の司祭たちにひとしい」。ここで、ヘルダーリンは「聖なる夜」のなかに住んでいるのではない。ヘルダーリンの現身は「同行者もなく、このように待ちつづけている」窮乏の夜にとどまっているのだ。ヘルダーリンにとって自らが住んでいる現世が、窮乏の夜であるが故に夜が「聖なる夜」として逆説的に意識されるのである。「聖なる」ものと「詩人」とのあいだで生身のヘルダーリンはけん垂している。コトバをかえていえば、「聖なる夜に国から国へめぐり歩いた酒神の聖なる司祭たちにひとしい」詩人から疎外されているが故に、ヘルダーリンは詩人の内実から夜をみているのではなく、夜を不動の畏敬をもって地上にとどまりつつも「聖なる夜」として斜視しているのだ。

疎外された詩人の神話　未完

天上性はない。ヘルダーリンの足は依然として地上的であり、その地上性をおおう夜のくらがりにふるえる生身の人間の裸像そのものなのだ。

まことに何をなすべきか言うべきかをわたしは知らない、そして乏しい時代に詩人は何のためにあるのかを

少なくとも、此の国に一億の人間が棲んでいるとなれば、その顔かたち、心のありさままで、断然個別の相においてことごとく掌の上にのせてみて、さて、それからのことである。哀しみたければそれもよし、笑いとばすもさらによし、ただそこまでは思惟することにとっての自明の前提であることを忘れてはならぬ。

一億の中には、佐藤栄作とかいう思想的にみれば青鼻たらした餓鬼にすぎない政治屋もいれば、生まれ婚姻し時至れば自らは死に、子はまたそれを繰返すという場所を決して離陸しない大衆がいる。

支配者の意識を自らの裡に繰込み、これと対決することなく通り一遍の図式的な現実理解でがりなりさがる馬鹿がいる。

「兜」とか「前衛」とかいう伽藍の裡に加わり、信徒としての祈禱に耽る、それだけのことだ。当人にしてみたら何かましなことをしているつもりでいるらしいが、世界観を至上物として固定するため観念性はそのまま容易に妄想に転じ、その政策論的具体化の過程で、組織論的には自己を具体化する共同性ではなく至上物化した世界観の現実化のための機能の共同性を結果しその場かぎりの刹々と移り変わるスローガンに身を装い、正義を名分として兵学的リアリズムをこそ生きさるをえない卑しい生きざまをさらす。

そこから資本制社会の尖兵への道はただの一歩であることは自明の理にすぎないのだ。正義への序列を口にするような者は悪人にきまっているのである。

彼等は自分たちがこの世界に関係しているということ、それこそが価値ある生き方という信念があるいは妄想にすぎないかもしれぬことを一度も疑ってみたことがないために、ついに世界観そのものを対象化することなく妄想の中へ自閉し去るのである。

〈もしも言葉が世界を変えるものなら、そのときは沈黙する〉

スローガンは「紙上不眠」。

阿呆らしいと思うのである。人間ごっこなんて、そんなに面白いものだろうか。

だからいつの頃からか、何ごとにつけ余り感動することはなくなってしまっている。「人生」というやくたいもない妄想も、いったん醒めてながめればなにほどのこともない。酔い狂うまもなく恋ざめの水をあおる毎日、こっちの方に余程リアリティがある。

とどのつまり、結局のところ私は私でしかないのだ。

この世界のすべてのことを「私」以外の場所で喋々しあう者どもを私は信じない。「私」とは、この世界の全体を部分とみなす「私」だ。そして「世界」とは「私」の繋辞である。私たちはこの繋辞をせ登りはせ下り、つまり思惟する。ヘーゲル的抽象化過程とハイデッガー的具象化過程がそこにおいて二律的に屹立しあう。

ところで繋辞はほとんど無数であり、ついにはないあわされて強固な岩盤とさえ視えてくるさて、これを整序するためにマルクスの登場をねがおうか？

真理とはいつでも秀れたフィクションである。私には思想書を一人称の小説のように読み下す性癖がある。私は何故、詩や小説や思想書といった言語による表現になすりよるのか？

彼を見舞っている地獄の相をあるいは虚構であるかもしれないことを許さぬまでに魅入られた、ほかでもない彼のその貌の中に見たいからである。

しかしながらそれを満足させてくれる言語表現には滅多にであえるものではない。苦しんでもいないくせに救われたがっているだけなのである。そんなことは文章を一行読めばわかるのだ。

人間というものが人類の「類」の一個として死すべきものであるという、不確定な、わかりもしない未来のことを確信的に語りたがる嘘つきがいる。もう大分以前に椎名麟三の「深夜の酒宴」を読み、作者の分身とおぼしい人物が俺はニヒリストだと呟くのを見てせせら笑ったことがあった。この戦後派作家は駄目になったのではなく処女作以来一貫して駄目なのである。大多数の感性がいわばニヒリズムをニヒったところにあるときに、さも深刻そうに俺はニヒリストだとは笑わせるではないか。

どうせ死ぬのだということも俺は何某主義者だということも自己を卑しめることを特権のように錯覚したマゾヒストの偏狭で傲慢な心根がさせる知たり顔にすぎない。生きてあることへ開かれ、さらに開かれてゆく彼を彼たらしめている精神の質だけが、人間の知性にとってなにものかでありうると私は思うのだ

■学新論へのノート

〈紙上不眠〉

里程表

12月16日
▽46年度・文化団体連合新執行部決定
議長　中村文夫（日文研）
副議長　桑山　裕（経済学会）
同　百渡瀬哲郎（国情）

12月13日
▽京浜安保共闘三名が交番を襲撃
横浜国大生柴野君警官に射殺され、また一名が重傷。

12月20日
▽沖縄コザ市で米人の交通事故処理から暴動発生。
この事件に対し、コザ署特捜本部は71年一月8日に「騒乱罪」事後適用。

1月18日
▽東大安田攻防闘争二周年。
全国全共闘連合は薩川公園で三五〇〇人を結集、集会・デモ。革マル派・日比谷野音で集会・デモ。結集一〇〇〇人。
この日東大はロックアウト。

1月20日
▽立大内集会。文連立着板粉失を契機として、大学当局の学生分断策動や、美観に名を借りた立看撤去策動を糾弾。平井総長代行に公開質問状。
▽一月31日に平井総長代行回答。「学生諸君へ」発表。通り一遍の回答にして見るべき内容なし

1月24日
▽三島由紀夫氏葬儀。

2月10日
▽沖縄全軍労三千人合理化粉砕をスローガンとして48時間スト。

2月11日
▽四回目の建国記念の日。
▽全国全共闘主催「紀元節復活反対集会」日比谷野音で開催。
沖縄全軍労ストとの連体を宮明

2月17日
▽京浜安保共闘・栃木県真岡市で武器奪取。

GROWING CHORI

アンチ・カフカ

〈虫になることを拒め！〉

ある朝、グレゴール・ザムザがなにか気がかりな夢から目をさますと、自分が寝床の中で一匹の巨大な毒虫に変っているのを発見した。彼は鎧のように固い背を下にして、仰向けに横たわっていた。……

カフカの名作「変身」はそう始まっています。若いセールスマン、グレゴール・ザムザに訪れたこの不条理な不意の出来事――就職を考えるあなたにふとかすめる不安ではないでしょうか？

巨大で冷徹なピラミッド・メカニズム――言い古された人間歯車論。なにかに〈所属〉することによってしか生きられない現代――であるならば、より自主性の発揮できる、創意の爆発が許されている企業を選ぶべきです。蝶理は、つねに問題意識をもち、新しい目標、新しいプログラムを推進するバイタル・チャレンジャーにこそふさわしい環境です。組織＝疎外ではなく、自らのイメージの実現に組織を活用するクリエイティビティ。カフカが提起した管理社会の疎外の寓喩・象徴としての「虫」にチャレンジしませんか？

蝶理は時代をリードするユニークな商社です。

蝶理

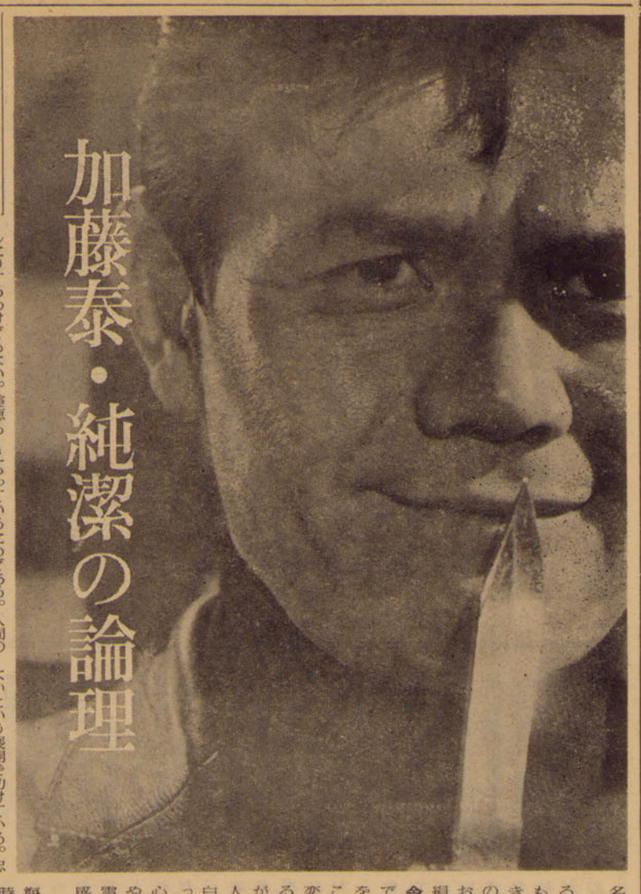
資本金45億円　従業員2700名

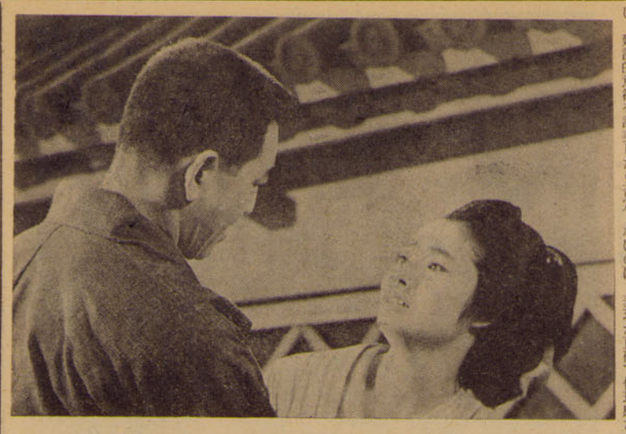
東京支社人事部（リクルートコーナー設置）　〒103 東京都中央区日本橋堀留町2-9 新堀留ビル
TEL (03)662-6611（大代表）

暗部を孕む大衆的感性へ収斂‥‥

映画作家論〈加藤泰〉

—三箇信也—





加藤　泰監督
「三代目襲名」（東映）
鶴田浩二と藤純子

▽忘れた唄にも似た哀しさ△

唄というものは目ら口づさむものである。わたしは忘れた唄を思い出そうとして加藤泰の世界に首を突込んでみようとしているようである。

そんな唄は大掃除のときなどに不意と縁の下から露われる、汚れ煤けた子供の頃の玩具のように生活の裏側にひっそりと息づいているのかもしれない。唄は少年の慰安であり玩具は小さな函に入る程度の大きさであればよい。寒くて暗い露地裏を過ぎるとき幽かに格子戸の奥から聴こえてくる程のものであればよい。間の手を入れる風も雨も小雪も侘しい露地にだけは相応しい。そこは何もかもを飲み尽くす底しれない暗さはあるが素直で実直な精神が棲む場所であり生活そのものの表情が確かにある場所である。驚ろくような賑わいはないのしかし他所にあってここでだけ相もかわらぬ生活と共にしっかりとした現実性を主張する。唄はそんな主張の優しい響きである。精神という暗部にのみ響き、それ以外はいっさい拒絶してしまう哀しさである。

加藤泰は自身の内にこのような場をもっているようである。彼の作品世界にはそんな慰安と哀しさが鮮やかな拒絶の手つきの中に浮かびあってくる。

彼の作品は希望も絶望も描かない。建設的意欲を讃美したり否定したりするわけでもない。美徳も悪徳もなく要するに倫理的ですらない。健康的、進歩的でもない。あるのはこの現実を快して肯定しないという精神の否定性、その拒絶の手さわりである。

彼は恐らく、たゞの生活者だけは信じるが、映画が何かできるとか何か主張するとか、芸術であるとかには惑わされず、たゞ生活者へ慰安を与えることができればよいという明確で困難な信念と立場を固守している作家である。

▽映像表現におけるパラドックス△

彼の作品を支える虚構は人間の純潔性にのみ収斂してみようとする思想である。

異常なシチュエーションの設定と平明な映像表現がとられる。平明簡潔な映像表現は観る者をして手易すく劇の中にひき込んでしまう。余計なもの計算以外のものを排除した明瞭で曖昧な部分のない表現が極端な設定の展開を支えている。完成度の高いつくりものでなければ誰が心置きなく享受できるだろうか。うす汚れた現実生活の対極に映画の位置を設けることそこで虚構を完璧に展開することあるがまゝの生活者の心を虚構の中で開放すること。これらは映画作家加藤泰の立場であり位置であり、個々の作品はその映像表現の中で確実にこの立場に裏ぅらされているのである。

極端で特異な設定が荒唐無稽でないのは、表現が正確で倫理感さえもっているためである。人間の価値を生活者の根底にある純潔性に於てのみ探ろうとするストイシズムのためである。

このような視座に立って彼が抉り出して来た世界は、勢い失ったものへの哀惜の念に裏打ちされている。節度ある哀感に満ちているそれは今日の大衆社会の既辺に存在する人間の心の底にもはや失われてしまったもの、失われてはならないにもかかわらず失われようとする心の自然律を加藤泰がストイックに、意志的に信じ込んでいるためである。過去の大衆芸能、旅芝居や人情話や種々の語りものの中に脈うっていた土俗的感性の秩序を自らの肉声の中にもっているためである。特異な設定も秘されて、抑制された心情も、彼がこの現実の中で内なる大衆の心をつかむために耐えている意力の反映に他ならない。彼の作品が時としてある種の架空性を孕んでいるのはこれらの意志力が頭脳的な物語の構成と確固たる倫理観、と無駄のなさすぎる展開が素材の如何にかかわらず単一の地点へ収斂するための緊密な過程となって寓意さえ付与されているためである。別な言い方をすれば現実生活の中にはそのような人間の心を実感できる場は失われてしまっている為、却って虚構性の中でつくりものとして定着されて初めて直接的に伝達可能なためである。観客の意識の中にそれらを享受できるような基盤をつくりながら同時に主題を展開するという二重の手続が、困難な作業であることはいうまでもない。しかし意欲的な大衆娯楽映画の作家はこの手続を駆使しなければならないのだ。

△心情のやさしさへの思慕△

「瞼の母」、「遊侠一匹」は夫々、長谷川伸の原作の映画化である。「瞼の母」は幼ない頃母親に生き別れた主人公のヤクザ者が尋ねあてた母親から、実の子は死んでしまったと突き離され追い返されるという周知の人情悲劇である原作の義理と人情のしがらみを巧みに描いた悲話は加藤泰によって素直に丁寧に映画に写しかえられている。ただ描写の力点は、母親も旅鳥の忠太郎もともに許されてする忠太郎の心情もそれを否定する母親の心も共に美しいのである余計な因果関係をひっとめたゞ哀しみだけが透徹して前面に浮き上ってくる。観客は改めて直かに忠太郎の心情の潔白さに感銘をうける。

「遊侠一匹」でも同じように、ヤクザの香掛時次郎は、一宿一飯の義理ゆえにヤクザを殺し、殺した男の頼みをきゝ、その女房と子供を助けるが、その女房お組を恋し、病弱なお組の看病に尽くす。やがてお組に夫を殺したことを告白し、別れたのち、宿場町の酒場の一隅でそれまでの始終をそこのおかみにそれとなく打明ける場面は、演ずる中村錦之助の抑制された演技、掴えっ放しのカメラがとらえる時次郎の横顔とともに正に名場面である。

劇の頂上に、この独白が置かれる。時次郎は話してみてもどうにもならない心の有丈を自分にいいきかせるように話すのである。その偶然門づけをして流れついたお組とめぐり逢い、病み窶れたお組は時次郎が助っ人で嫁いできた金で買った薬も間に合わずに死んでしまい。時次郎はついにヤクザをすてて故郷の村へ帰ってゆく、この「遊侠一匹」は困難な苦しい恋愛劇であり、文句なく悲劇であるしかない設定であるが、加藤泰がそこで収斂させてゆくのは、主人公時次郎の裏目なしの心情の潔白さである。劇は純潔の論理に従って展開し完結する。時次郎の心根のやさしさと美しさは、青空や夕暮れの風景、夜の宿場に降る雪といった情景と一体となって実感をもって表現されている。

この作品のファーストシーンが海岸の街道で追手にとり囲まれた時次郎がいきなり追手のヤクザを斬り殺し血潮がまっ青な空に飛散するというところから初まり、前半お組の夫の三蔵と対決しこれを仁義を切って殺すまで血と乱闘の場面が多いことと合わせてみると加藤泰の計算された悲劇の展開の奥行がわかる。

一方「幕末残酷物語」は新選組を舞台にしてその特異な非人間的組織の実態が叔父の仇打と勤皇の志を秘めて潜入した若い隊士を中心に展開される。厳しい局中法度の厳既と組織を存在させるための殺戮、処刑が激越な調子でリアルに描写される。

▽相反する世界の構成△

主人公の若い隊士はその中で悩みつつ目的のため率先して新選組の隊士として地位を固めてゆくが中所の女中との恋が始まると組織の異様なまでの冷酷な非人間的矛盾と、やさしい恋の情感にみちた世界の間で追いつめられ、志の純一さは自分を潜入させた勤皇のイデオローグも大義の下に平然と殺する方法である。この作品を「政治的人間の否定だけがあって抵抗も平和もない」とみる。「新選組」は「遊侠一匹」に於けるヤクザの捉であり、「瞼の母」に於ける家に他ならない。

これらは加藤作品の夫々に種々の形で設定されて彼の虚構を構成し劇や物語を客れる定型となってその世界の輪郭を型どっている。

▽理想像を描く△

三代目襲名で

「幕末残酷物語」で分析された人を くりかえす新選組も共に信じられずやり場のない憤怒となって爆発する。身元が知れて斬り狂う主人公が素人の眼前で刺殺され加藤泰はリアルにそして冷やゝかにそれを視据えるといった感じのエピローグ。新選組は日本映画史上初めて「殺人集団」として暴露された。大衆娯楽の特に娯楽時代劇映画の恰好の題材であった新選組は冷やゝかな眼で残酷な人殺し集団として描き出されたのである しかし加藤泰のリアリズムは、新選組の実体を的確に表現する以上に不幸な恋人たちの情感に満ちた恋の描写に焦点を合わせている。この相反する世界を巧みに計測する構成と描写は彼のリアリズムが理詰めでありながら後に余情が残ることと無関係ではないようである。哀しい恋人たちの情動の確かさが新選組というあるいは勤皇派の主導的設士たちの政治的集団の実体を暴く根据であり、批評の要となっているのである。

前者は美しく後者は残忍で非人間的であり純粋なものかけらもなく醜悪であるといった具合に。この作品にもし加藤泰の意図があるとすれば人間の情動の太さを美しいと視る心を観客の内に蘇生させようという意図とそれを際だたせる方法である。

加藤　泰監督
「皆殺しの霊歌」（松竹）
佐藤允と
倍賞千恵子

▽大衆のなかでの自己確認△

「喧嘩辰」「骨までしゃぶる」は、底ぬけに明るい主人公のひきおこす稍伏な物語である。主人公のまわりには善意あふれる人物が登場し、社会の下積みに生きる善意にみち、楽天的な人物の生活が軽快にとらえられている。

人間の美質は不変であるとこの稍伏さを前者は車夫の無鉄砲な一本気のまき起す喜劇として、後者は極貧のうちに農家に育ち郷に売られても明るく率直な娘の恋と自由への闘いの中にとらえている。

いずれにしても興業資本の要請する題材を巧みに自己の世界の中に展開する力量は、群を抜いているのである。加藤泰をして企業内抵抗派の筆頭とするむきがある。しかし加藤泰は企業の要請する映画を積極的に自家薬籠中のものとしているのであって抵抗は内在化しているに違いない。何を描いても自分の映画にしてみせるだけの自信を安定した職人技は表現意識そのものの中に肉化しているために企業の要請は自明の前提にすぎまい。迎に、加藤泰という作家を日本の映画資本が創り出したのであるといってもよいのである。

娯楽と通俗に徹しながら日本人の大衆心理を抉って、大衆の感性のレベル上でその表現を全うするという作家が企業内抵抗派のように見えるのは、日本の映画作家の住んでいる特殊な風土の問題である加藤泰は日本の伝統的な職人芸の誠実な継承者である。彼が執着するのは造歩的イデオロギーでもなく芸術映画をつくろうというヤクザな思惑でもなく、歴民の哀怒哀楽にとけこんでしまう世界の中に、大衆の心に直結できる描写で裏目なしの慰安を与えようという思念であり頑固な意志である。職人芸へと進ませるのは生活者としての自覚であるが、彼の映像表現のリアリティを根既から支えているものは創造としての自己意識の内に現えられた人の存在の自然態「純粋戦中派の噴怒」と評したまさはそのものである。しかし加藤泰はそこに、看守の横暴に抵抗したため主人公が入れられた暗い独房の中で、じっと何かに耐えているような安藤昇の暗い顔の中に、秘そかに彼が思いを寄せる桜町弘子の唇と喉をモンタージュでつなげてみせることを忘れてはいない。特攻兵が所信を貫徹させるものがある純潔な精神であるとすれば精神とは生理ではないのかといった思いが込められている。これが加藤泰の眼力を保証しているのである。とすればこの凝視の中に「皆殺しの霊歌」に至る基盤が用意されているのである。加藤泰は確に戦中派精神の現在における時代的挫折を描いたのではない、「純粋戦中派の噴怒」の激しさを、その正統性を自己のドラマの定型の極限に緊張させて、同世代者の情熱をこめて、自己の実存とからめて主張したのである。

▽「皆殺しの霊歌」にみる架空性△

「皆殺しの霊歌」は私の周辺の加藤泰の良き観客の中でも評価が分れたが、極端な設定の架空性をどのように観るか、でたらめな嘘にすぎないのか、あるいは、劇の必須の前提とみるかという点では他の作品にも共通して特徴的であった。ただこの「皆殺しの霊歌」が現代劇であるために、特に目立つのである。しかしこの架空性は加藤泰にとって意識され意図された前提であり、その内部世界を表現する上での現律である。自己の最も秘されたものを素裸で出せば醜悪なだけである。定型の架空性は必要欠くべからざる唯一の方法である。

斉藤竜鳳は「皆殺しの霊歌」を評して「大きな前提となる個所に欠陥があり（リアリティがないということだ）それをあえて撒った ところに失敗の因がある。男が女前提とは、クリーニング屋の少年がマンションの一室で五人の有閑マダムに強姦され目殺するという設定であり、少年の顔見知りの同郷の労務者の青年が少年に代って五人の女たちを次々と惨殺するが警察に追いつめられ少年と同じくマンションの屋上から飛び降り自殺をするという結末である。労務者は一人づつ女を殺してゆきふと知り会った大衆食堂の女店員に心をひかれる。食堂の主人から彼女がヤクザものの実兄を絞殺したという過去があることを聞かされる少年の部屋を訪れる労務者が少年のステレオで聴く橋幸夫の流行歌がしずかに流れる。警察の捜査がすみ事件が次第に明らかにされてゆく。労務者の身元が判明し、彼が昔、まちがいを起した自分の花嫁を新婚初夜に殺害したという過去がしらされる。労務者は女店員から自首をすすめられるが、最後の一人を殺す決意をする悲しい荒川土手の夕暮の逢びき。最後のひとりをマンションの一室に追いつめた労務者と女の脳裏に浮かぶ少年のイメージ。女に少年に行ったことを自白させるクライマックス。何故何の関係もない子のことでこんな非道いことをするのかと叫ぶ女に投げつけられるのは「俺には我慢ができないんだ。お前達は寄ってたかって、一時キレイなものをメチャメチャにこわしやがった。」という絶叫。女は体を与えて命乞いをしようとするが、労務者はかえって殺意を噴出させるその瞬間の労務者の脳裏に浮かぶ少年との短かい出会いの記憶と女たちが小年を犯すイメージ。ついに女を殺害して、警官たちのとりかこむマンションの屋上から飛び下りて死ぬ労務者。最後はこの男を待つ女店員が雨の中、ひき裂かれた労務者の手配写真を一心に復元している。その手配写真は一部欠損している。

主張されているのは正義ではない。この作品の全面を流れるのは押し詰められたような殺意であるその殺意は純潔の自己証明への衝動に貫かれている。この生理的ともいえる殺意は行き場がなく冷めたいコンクリートの狭間で亡霊のように漂っている。

「一希綺麗なもの」とは、生理的な殺意によってひき出された人の実存の、暗い生命の自然展律に包まれて、加藤泰が自己の劇の中で収斂させるものの異名であり、大衆の心に慰安を与えるべく娯楽映画をつくりつづけるうちに、大衆的感性の下方へと上昇して探りあて表現えた、生活者の原点であり、そうであると見られた加藤横の理念であり、この作品の場合は現実否定の根拠である。

▽「俺は変りたくないんだ」△

「皆殺しの霊歌」は傑作であるが、観るべきは作品総体が発揮する純潔に同う暗い精神の現世否定の旋律そのものである。

もしこの作品が美しいならその美は現実の醜悪さの表象に他ならずもし哀しい旋律に感銘があればそれは俗世の生活者の汚辱の深層に響いているという具合に。

名作「男の顔は履歴書」は観ていないがそれに続く「懲役十八年」で、特攻隊くずれの戦中派同世代）の実存ドラマを完結しえたとき「皆殺しの霊歌」への契機が胸めたのではないだろうか。元来時代劇を主として撮りつづけてきた加藤泰の数少ない現代劇である自分と 同世代の 主人公に、戦中派の自己証明への希求が切実に託されて、加藤泰は初めて自己の主張を思想的に提示したのである。

この世代的メッセージを託された特攻隊帰りの主人公の転向ドラマは、主人公が戦友と共に廃墟にマーケットを築こうとする理想を抱いて朝鮮人の妨害と闘い、為に戦後十八年を牢獄で暮すが、夢の実現を託した戦友がマーケットを横どりのヤクザになり下り、共に夢を託したはずなった戦友の娘の身に災厄がおよぼそうになると脱獄して、友人のヤクザを殺すまで一貫して一個は変わりたくないんだ」という強い情動につらぬかれている。廃墟の東京で特攻隊長の主人公を尋ねてきた戦友の娘に向かって「お嬢さん自分を救うものは自分しかないのですよ、次になにかあるとすればそれは友達ですよ。僕をあなたの友達にして下さい。」というシーン。夢を託した営のマーケットを足場にヤクザになり果てた戦友との対決のシーンでは「こうでもしなければ生き残れなかった。お前の場所は残してあるのだ」という戦友に対して「俺は変りたくないんだ」と叫びこの転向者を殺し、手下のヤクザ共をなぎ倒し再び刑務所へ逆もどりしてゆく。主人公は終始一貫、自己の信じたものに殉ずるそのために戦後という時代を刑務所の中で過ごした。この寓意に満ちた劇の構成は、映画が果しうる批評のすべてである。この寓意に満ちた劇は、映画は主人公の正義漢安藤昇が送る刑務所の生活を刻明に活写し、刑務所の中の社会でも主人公が一貫して正義を通そうとして刑期がのびてしまう様を残酷な非人間的な冒険の内に展開する。刑務所の内でも外でも特攻隊員としての自己を曲げずに生きようとする主人公は桶谷秀昭が「純粋戦中派の噴怒」と評したまさはそのものである。しかし加藤泰はそこに、看守の横暴に抵抗したため主人公が入れられた暗い独房の中で、じっと何かに耐えているような安藤昇の暗い顔の中に、秘そかに彼が思いを寄せる桜町弘子の唇と喉をモンタージュでつなげてみせることを忘れてはいない。特攻兵が所信を貫徹させるものがある純潔な精神であるとすれば精神とは生理ではないのかといった思いが込められている。これが加藤泰の眼力を保証しているのである。とすればこの凝視の中に「皆殺しの霊歌」に至る基盤が用意されているのである。加藤泰は確に戦中派精神の現在における時代的挫折を描いたのではない、「純粋戦中派の噴怒」の激しさを、その正統性を自己のドラマの定型の極限に緊張させて、同世代者の情熱をこめて、自己の実存とからめて主張したのである。

▽円環する純潔の論理△

彼の作品の物語性や劇の特殊な型の設定の中から彼の思想を抽出しようとすると間違うことになるだろう。加藤泰が作為的な物語の中で円環させるのは終始一貫して純潔の論理であり、精神の純潔性の生理的自然律が奏でる世界であり、それはもし基盤をもつとすれば、あるがままの大衆の感性の隠された部分にである。このようなかたちで加藤泰が描きつづけ守っているのは、他ならない日本人の血と涙の伝統に他ならない。

（さんがしんや氏は映画批評家。本学映研OB）

斬新なる諸姉諸兄の投稿募集！

—立教大学新聞学会—

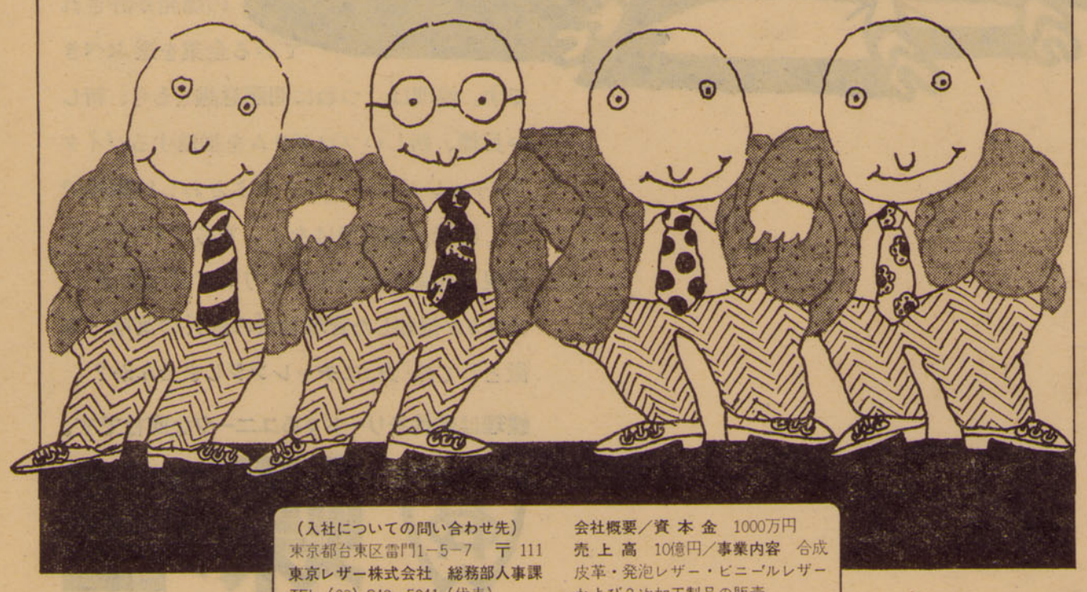
肩を組む仲間たち

●社員1人の年間売上3000万円

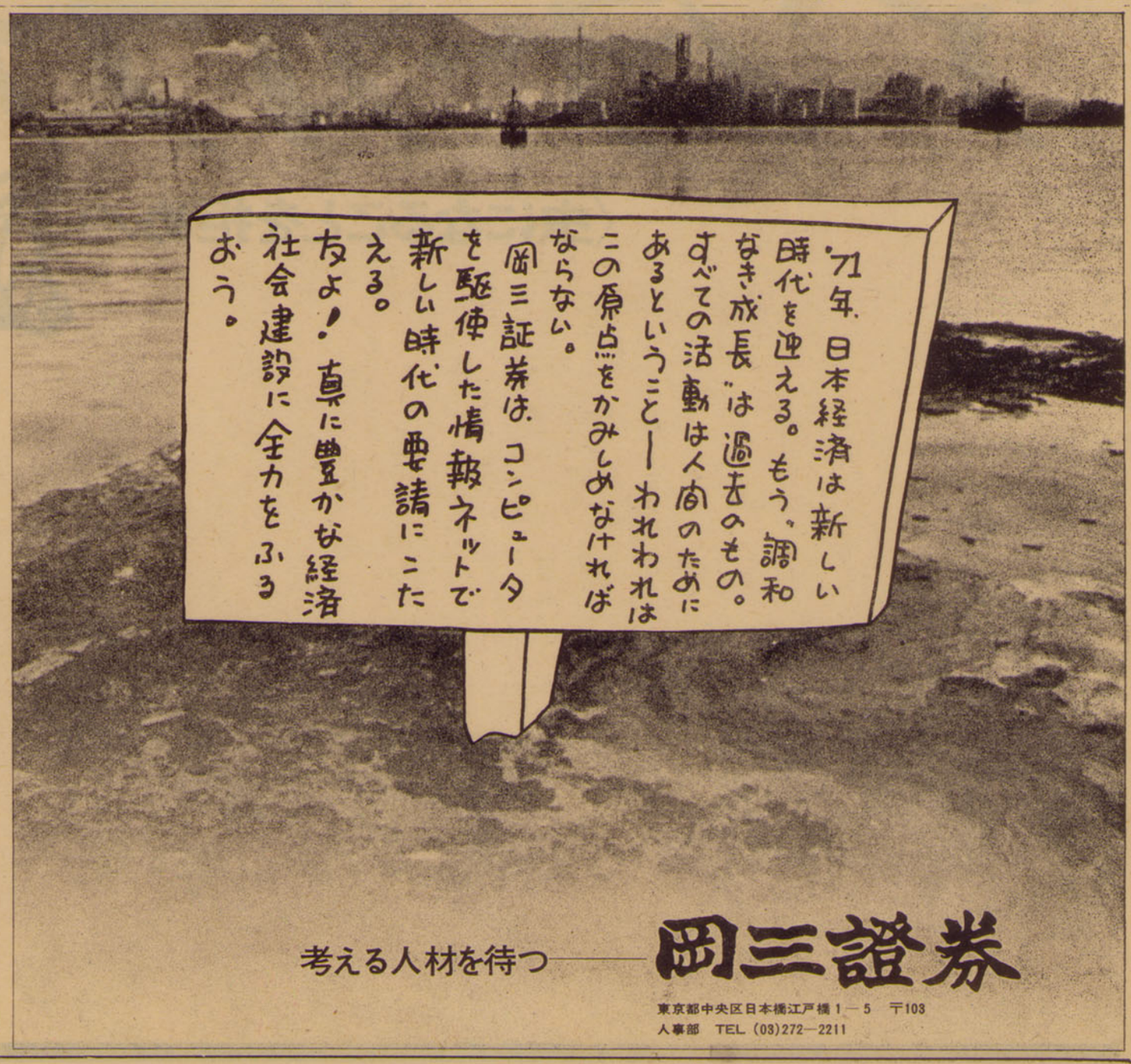
とにかく若い連中がいっぱい。ハツラツむんむん。これがガッチリとチーム・ワークを組んでいるのだから、強い。しかも、社長みずから"オレも——"という調子。

1人あたりの年間売り上げ3000万円、社の年商10億円。まれにみる成長力も、実はこんな人の心と力の"和"を考えれば当然、といえそうです。

"素材から製品までの垂直流通システム"という新しい未来をひらいた東京レザーは、明日に向かって休まず走り続けています。



（入社についての問い合わせ先）
東京都台東区雷門1-5-7　〒111
東京レザー株式会社　総務部人事課
TEL（03）842-5041（代表）

会社概要／資本金　1000万円
売上高　10億円／事業内容　合成皮革・発泡レザー・ビニールレザーおよび2次加工製品の販売

東京レザー株式会社